

令和 7 年 4 月 18 日

(※受付番号)

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース
A グループ研究A
校園コード (代表者校園の市費コード)
741702

代表者	校園名 :	矢田北小学校
	校園長名 :	清水 健司
	電話 :	06-6705-1601
	事務職員名 :	東 将武
申請者	校園名 :	大阪市立矢田北小学校
	職名・名前 :	主務教諭 東山 由美
	電話 :	06-6705-1601

令和7年度「がんばる先生支援」申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	継続研究 (2年目)
2	研究テーマ	確かな学力を身に付けるための指導・支援方法を探る —子どもの特性を知るアセスメントと環境整備を通して—			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を項立てて記載してください。</p> <p>1、児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求 2、環境整備UD化の追究 3、専門的な講師による研修会や講演会への参加を通じた、教員の専門的知識と自己研鑽の意欲の向上</p>			
		<p>(1)研究内容の詳細 ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>学校現場において、個々の特性に応じた支援を必要とする児童・生徒が増加傾向である。また、本校では、不登校やネグレクト、ヤングケアラーなどが課題になってきている。昨年度まで、矢田中学校区(2小1中)において発達の課題のある子どもたちに確かな学力をつけるために、教職員の意識改革とスクールワイドPBS(ポジティブ行動支援)の取り組みを進め効果を上げた。しかしながら、3校で取り組みを進める上での課題もあり、同じペクトルで進む難しさも感じた。特に環境整備のUD化については基本ベースは同じであると考えるが、個々の学校によって変わる部分も大きくある。そこで今年度は改めて原点に戻り、3年間の成果を基に、さらに深く研究を進めようと考えた。UD化を中心にさらなる研修・研究を進めることで、境界知能の児童や支援が行き届いていない児童への指導支援を効果的に進めることができるのではないかと考える。また、どの児童においても適切な学習環境のもと適切な支援をすることで成長が期待されるが、なかなかそのようになっていないのが今日的課題の一つでもある。その子の躊躇が個人の要因であるのか、それとも学校、家庭の要因によるものかなどのアセスメントを丁寧にとり分析し、児童に還元する。そうすることで少しでも支援を必要とする児童や、不登校児童の学力保障になればと考えている。</p> <p>そこで、本研究では次の3点について重点的に研究を進める。</p> <p>① 児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求 (hyper-QU、スクリーニングシート等)</p> <p>② 環境整備UD化の追究 (教室環境、学校環境、授業環境、UD全国大会参加)</p> <p>③ 教員の研究会・研修会参加を通した専門的知識と自己研鑽の意欲の向上</p> <p>学力向上を支える上でも、基礎学力につながる下位スキルのアセスメントをとり、児童の躊躇がどこにあるのか、個に応じた支援、個別最適な学びにつなげていきたい。さらに、教室や学校環境、授業環境のUD化を行い、児童が安心して過ごせるようにする。日々、子どもたちと関わるうえで、多くの専門的な視点をもちアセスメントを行うことで、適切な教育を行うことができるよう、大学教員や講師を招聘し研修会を実施し専門的な考え方を広げていきたい。教員が専門的な知識を獲得することにより、学ぶことの大切さを実感するだけでなく、視野を広げ児童と向き合い柔軟な対応ができるようになると考えられる。本校で抱える課題を改善し、地域の児童、また、かかわる教職員にとって有用となる研究や研修会を実施していきたい。</p> <p>(2)継続研究 [2年目] ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>			

学校現場では、個々の特性に応じた支援を必要とする児童・生徒が増えてきている。近年では、ゲーム障害などの新しい障害の診断もされるようになり、今後も社会環境により配慮を要する児童・生徒がさらに増加していくことが予想される。矢田中学校区においても同様で、発達の課題のある子どもたちが多く、ASD、ADHD、DCD (LD) 、愛着障害など様々な課題がある。教員の意識改革とともに個に応じたエビデンスベースの対応が求められる。一方、境界知能の児童は見落とされやすく、支援が行き届かない場合が多い。適切な指導支援がない場合、思春期や成人期に問題行動や反社会的な行動をとる可能性が高いと疫学統計学により証明されている。本校でも、2年前に在籍した児童が、そのような問題行動を起こし、学校を混乱させた事例がある。そのため、どの児童においても適切な学習環境のもと適切な支援が必要である。個人の要因であるのか、それとも学校、家庭の要因によるものかなどのアセスメントることが大切である。また、運動面で DCD (発達性強調運動障害) 傾向の児童や不器用さの見られる児童も複数名いる。そこで、本研究では次の 4 点について重点的に研究を進める。

- ① 児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求
- ② 環境整備UD化の追究
- ③ 運動面での不器用さを緩和したり、姿勢保持をしたりするための体づくり
- ④ 教員の研究会・研修会参加を通した専門的知識と自己研鑽の意欲の向上

学力向上を支える上でも、認知機能を高めるコグトレや視機能を高めるビジョントレーニングなどの体づくりなどを通じて、脳機能に対してアプローチを行う。さらに、教室や学校環境のUD化を行い、児童・生徒が安心して過ごせるようにする。また、現行の校内で行われている集団育成などに関わる実践交流会などでは、問題行動を起こした児童・生徒に対しての対処療法について話し合う場が多いが、それではリスクマネジメントは不十分である。日々、子どもたちと関わるうえで、多くの専門的な視点をもちアセスメントを行うことで、適切な教育ができるといえる。そのため、専門的な知識を得るために、大学教員や講師を招聘し研修会を実施する。教員が専門的な知識を獲得することにより、学ぶことの大切さを実感するだけでなく、視野を広げて児童・生徒と向き合い柔軟な対応ができるようになると考えられる。課題を改善し、地域の児童・生徒、また、かかわる教職員にとって有用となる研究や研修会を実施し、矢田中学校区に広げていくようにしたい。

(3) 継続研究 [3 年目]

		<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <p>4月 【研究企画会・推進委員会】 本校 校内委員会「がんばる先生推進委員会」研究の進め方、見込まれる成果等について検討する。 【担当者会】 研究の進め方、見込まれる成果等について検討する。 ・昨年度までの取り組み成果と課題をふまえ、研究内容の焦点化を図る。 ・先行研究をもとに年間計画を立案する。 ・児童アンケート、教員アンケートを作成する。</p> <p>【校内での全体共有】 年間計画の共通理解を図る。</p> <p>5月 児童アンケート・教員アンケートの実施・分析 QUセミナー 河村 茂雄</p> <p>6月 教員研修プログラムの作成 児童アセスメントの実施(アンケート・Hyper-QU) 研修会(授業UDカレッジ オンデマンド) 大学教授の視察・児童の課題の把握・研修会</p> <p>7月 研修会(授業UDカレッジ オンデマンド)</p> <p>8月 研修内容を踏まえた研究経過の分析と今後の取り組みの検討</p> <p>9月 研修会(授業UDカレッジ オンデマンド)</p> <p>10月 PBS研修</p> <p>12月 近隣幼稚園・保育園への聞き取り(アセスメントシート) 日本授業UD学会全国大会参加</p> <p>1月 研究結果の分析・研究成果のまとめ 【がんばる先生支援 研究発表会】 公開授業・研究協議 指導助言 大阪教育大学教授 庭山 和貴 第2回 研修会・研究発表会(参加者アンケート)</p> <p>2月 教員・児童への事後アンケート実施 中学校への引継ぎ</p> <p>5月～3月 担当者会は毎月実施 日本ポジティブ支援ネットワークの研修会には随時参加 関西国際大学夜間講座「みんなの特別支援教育」(年2回 1回5日間) 参加</p>
5	活動計画	<p>出張を伴う研究会への参加、外部講師を招聘する研修会の実施等、経費執行が必要な取組内容を記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本授業UD学会全国大会(筑波) 参加 ・「みんなの特別支援教育」(尼崎:関西国際大学) 参加 ・授業研究会の指導助言 講師:大阪教育大学 庭山 和貴 准教授 年3回実施 ・hyper-QU 理解研修 講師:大阪教育大学 水野 治久 教授 年1回実施 ・QU 学級経営セミナー 早稲田大学教育・総合科学学術院教授・博士 河村 茂雄
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>(1)継続研究(2年目、3年目)において検証方法の変更の有無を記入してください。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 変更しない。 理由 経年にわたって、成果を確認するため。</p> <p><input type="checkbox"/> 変更する。</p> <p>(2)大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成および、「教員の資質や指導力」の向上について、それぞれ見込まれる成果を端的に記載し、その成果について客観的な指標により、必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。(いざれかに☑を入れてください)</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>○hyper-QUやスクリーニングシートを活用し、児童の学級満足度を図るとともに、子どもたち同士のつながりを可視化し、データとして活用することで、学級経営、校内の児童理解に繋げていく。各学級にあつた取り組みを進めていく指標としていく。</p> <p>《検証方法》</p> <p>昨年度のhyper-QUの結果と比べ、満足度の高い児童を増加させる。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>○認知機能や視機能を向上させるトレーニングに関する研究を進めることにより、児童の「対人スキルの獲得」や「書く力」・「読む力」・「運動能力」などを育成し子どもの自信につなげる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>抽出学級の児童・生徒を対象とした視写テストにおいて速度と正確性を実施前より上昇させる。</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>○不器用さを改善させるための教室・学校環境づくりを進め、さらにUD化を進める。それらの取り組みが、児童・生徒のボディイメージを高める結果につなげる。</p> <p>『検証方法』 体の発達、特に腕や手指の運動能力と関係が深い描画検査グッドイナフ人物画知能検査や運動能力を計る検査において実施前後で比較し平均値を3ポイント上げる。</p> <p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 <input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>○教員の研究会・研修会参加を通して発達に対して専門的な知識を身に付けることができる。 特に、スクールワイドPBSや授業UDについて研究を深める。</p> <p>『検証方法』 教員へのアンケートを実施し「研修会に参加して役に立った」の肯定的回答を80%以上にする。</p>						
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 報告書提出日までに必ず行ってください。</p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="441 967 1383 1034"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 8 年 1 月 28 日</td> <td>場所</td> <td>矢田北小学校</td> </tr> </table> <p>◆【必須】 waku².com-bee掲載による共有</p> <p>○掲載の日程（予定）</p> <table border="1" data-bbox="441 1102 965 1169"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 7 年 12 月 1 日</td> </tr> </table> <p>◆他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 8 年 1 月 28 日	場所	矢田北小学校	日程	令和 7 年 12 月 1 日
日程	令和 8 年 1 月 28 日	場所	矢田北小学校					
日程	令和 7 年 12 月 1 日							
8	代表校園長のコメント	<p>1. 新規研究（1年目）</p> <p>今回の研究テーマは、「がんばる先生支援B」で、矢田中学校下の2小1中での取り組みから見えてきた成果と課題を精査し、自校で更なる発展を目指していくために有効な手立てである。 研修会や各種の研究大会に多くの教員が参加することで、教員個々の専門的な知識が深まり、専門的知識に裏付けされた児童理解が共有できると考える。個別の対応について今まで以上にきめ細やかな配慮を行い、授業環境、学校環境を整え個別最適な学びに繋げていきたい。 この研究を通して、教員一人一人の指導力が向上し、児童理解が深まりこの研究に関わる人たちのウェルビーイングが高まることを期待する。</p> <p>2. 継続研究（2年目）</p> <p>1年間の研究を終え、SWPBSを取り入れた取り組みを進めることで、子どもたちが自分の良さを認められてると感じる場面が多くなってきた。また、校内研修を通して、自校の子どもたちの課題や良いところに目を向け、教職員が一致して同じペクトルで、今年度の取り組むべき方向性も確認できた。今年度の研究では、教職員の行動マトリクスも作成し、本校だけの取り組みにとどまらず、矢田中校区でのモデルを完成させたい。 2年目の研究であるため、追跡調査を実施し、より児童・生徒にとって有効な支援について、研究が進むと考える。この研究を通して、教員一人一人の指導力が向上し、児童・生徒理解が深まることを期待する。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>						